

2002年9月30日 日本テレビ 定例会長社長会見 要旨

1. ジャイアンツ、セ・リーグ優勝に関して

記者:ジャイアンツのリーグ優勝の感想と、日本シリーズの予想は？

氏家会長:我々が待ち望んでいたことです。日本シリーズは、7戦まで行ってジャイアンツが勝つと一番いいね。

記者:今季のジャイアンツ戦の中継の総括は？

萩原社長:視聴率は、私どもの平均が16.6%ということでございまして、昨年が15.8%でございましたので、0.8のプラスということであります。

それから、他局も含めて全平均で16.2%というのも、昨年に比べて1.1%のプラスですから、明らかに上昇したと考えていいのではないかと思います。

その要因としては、今年の巨人は、若手を中心とする新戦力で、スピーディーでスリリングな試合が多かったということ。また、月曜から金曜までの平日は、放送を60分延長して、割合と終盤に逆転とか、スリリングな状態が多かったということで、そういう場面を伝えられるケースが、かなり多かったということもあるかと思います。

これは前から申し上げていますが、21時以降の数字というのは、いい試合の場合非常に高くなりますので、22時まで延長したことが、いい結果を呼んだというふうにいえると思います。それから、終盤巨人が独走したんですけれども、むしろ視聴率は上がっております。9月などは、優勝決定試合もありますから、17.3%という数字でして、去年に比べてかなり大きく上がっております。去年は7、8、9月というのが、ずっと下がってきていた訳ですから、これは松井の三冠王というのが、大きく貢献していると思います。

記者:来季の放送は？

萩原社長:放映権については読売新聞といろいろお話し合いもし、お願いもしています。できれば今年と同じような形ということで、話し合いをしている最中です。編成については、今年の月 - 金の60分延長の成果をふまえて、来期は土・日も60分延長しようということで、つまり、巨人戦に関しては全曜日60分延長で対応するということを、私どもは決めております。

記者:野球の人气が下がった下がったと、去年あたりはいわれていましたが、今年の数字を見ると、人气は回復したと言ってもいいんじゃないですか？

萩原社長:今年は阪神が非常に頑張ってくれて、野球全体を盛り上げる上で非常に大きかったと思います。阪神に限らず、他のチームも企業努力をしていただいて、プロ野球全体が面白い試合を展開す

るようになれば、まだまだ、十分商品価値もあるし、今年以上の数字が期待できるようになると思います。

記者:中継に関しては特別な日本シリーズバージョンのようなことは、考えていますか？

萩原社長:特にありません。今年も最初に申し上げた通り、試合をいかに面白く伝えるか、現場の面白さ、スリリング、エキサイティング、そういったものをいかに忠実にお伝えするかということが一番大切なことだと思っています。

ですから、あまり変わりませんが、今年のシリーズは、松井とカブレラというすごい対決があるわけですから、この、松井・カブレラという大目玉に焦点を当てるような形になると思います。

それから、今年の巨人は非常に機動力を使って、かなり走って来るチームですね。西武も松井稼頭央を中心として非常に走ってくるチームですから、そういった意味で、長打力とスピード力という、似たタイプのチームだと思います。大接戦、大激戦を期待しています。

記者:営業的にダメージが大きいということで、土日の60分延長はしないというのを方針変更するポイントはどこにありますか？

萩原社長:今年は初めてのことだったんですが、営業は営業なりに非常に工夫してくれたし、編成もそういった営業的なダメージが無くなるよう、工夫をいたしました。クライアントさんにも、ある程度のご理解をいただけたと考えておりますし、そういった諸々の総合判断です。

記者:この60分延長に対する視聴者からのリアクションは？

萩原社長:最初のうち、「火曜サスペンス」が、22:00スタートになったりという場合には、かなりのクレームがあったことは事実です。これも、多少慣れの問題というか、数からすると少なくなりました。

2.10月改編について

記者:10月改編の狙いと、上期の視聴率の分析は？

萩原社長:上期の視聴率に関しましては、9年連続で上半期の四冠王は取れております。一番大きな要因は、朝、昼、晩のレギュラー番組が、他局に比べて、安定した視聴率を取ったということが、基本になっていることは間違いありません。その中でも今回の上半期には、色々なことがありました。特にサッカーW杯がありまして、当社はクジ運が悪かったので最悪のシナリオを想定しておりましたが、これは再三申し上げているように、むしろW杯は私どものほうが得をしたというか、プラスになりました。クジ運と逆の結果になって、非常に喜んでいるということでございます。

それから、いわゆる長時間番組。24時間テレビですが、私どもは平均が15.4%という数字を取っているんですが、他局の“24時間テレビ”が、割合低調に終わったということもございます。

それから、9月11日のテロ特番が30.4%という非常に高い数字をいただきまして、こういう高い数字が取れるということは予測していなかったものですから、フジテレビの「北の国から」に、かなり拮抗できる要素もあったということでございます。

それから、巨人戦のナイターの視聴率が、上昇してきたということですね。朝でいうと「ズームイン！！SUPER」「ザ！情報ツウ」という、朝帯の改革が、ジワジワといい結果が出始めているということや、「行列のできる法律相談所」とか「ザ！世界仰天ニュース」とか、最近始めた番組がプライムの柱になりつつあります。また、それを若いクリエイターが、やっているということで、非常に将来が楽しみだなと思っています。

10月の改編の狙いですが、ひとつは、編成の基本方針がファミリー路線だということはいささかも変える気はございませんが、お父さん、お母さん、おじいさん、おばあさんは非常によく見ていただいているんですが、お子さんとお孫さんについては、フジテレビと大体同じくらいだということで、やっぱりファミリーといっている以上は、お子さんとお孫さんにも見てもらわなければいけないということで、これを10月改編の狙いにしております。具体的には、月曜から木曜まで「別バラ」というくくりで23時台のバラエティー番組を編成したこと。それから「電波少年」を思いきって土曜日の22時という、メインの枠にもってきたこと。それから、3つのドラマですね、いずれも主役に若者に人気のある若手の俳優さんを起用しました。しかも、原作がアニメということで、お子さんとお孫さんにも見ていただけるような編成を心がけております。

それから、いよいよ10月5日から始まります映画の「明日があるさ」のキャンペーンで、吉本興業さんと手を組んで、キャンペーンもやっています。

もうひとつの狙いは、報道番組の強化ということで、私どもニュースは強いんですが、いわゆるTBSでいう「報道特集」とか、テレビ朝日でいう「サンデープロジェクト」とか、そういった本格的な報道番組がございませんでした。それを、今回の9月11日の特番をふまえて、思いきって、日曜日の18:00～19:00といういい時間、ほとんどゴールデンと言ってもいい時間に、本格的な報道番組を編成しました。

それから、10年間ずっと頑張ってくれたキャスターの真山、木村に代わって、笛吹、藤井という若返りのキャスターを起用しました。

3. 地上デジタル放送

記者：次に地上波デジタルですが、現在の進捗状況と、基本的な編成方針が決まっていたら伺いたい。

氏家会長：地上波デジタルについては、まだ編成方針を決めるまでに至っていません。

それが、ひとつには、台東区が上野にテレビ塔を建てたいといっており、これがどうなるかということを見ないと、なかなか先が読みきれないってこともございます。

技術的な検討というのはNHKも含めて、続けておりますから、これは着実に進んでおります。新しい鉄塔を作るにしましてもとりあえず間に合いませんから、来年の12月末には、間違いなく東京タワーの低い部分から出しますから、これは、やれると思います。

記者:このところ、通信のほうから電波使用料の値上げという話も出ていますが。

氏家会長:これは、まだ話を正確に聞いておりません。総務省からも私のところには、来ておりませんから、どういう考え方をしているのかわかりません。

ただ、これはスジから言いますと、今の体制のままで、国が公的負担でアナ - アナ変換してくれると決まった訳ですから、今の使用料の料率を変えるという前提になっていません。ここはやっぱりスジとしては、お変えになるべきではないと考えてます。

ただ、通信業者の方が大分ご不満を言われているようです。通信業者さんと我々は通信と放送の融合ということ、技術的には仲良くやっていかなきゃいけない訳ですから、そのへんのところは直接やるかどうかは別としてご意向は聞いてみたいと思ってます。

4. マスメディア集中排除原則の緩和について

記者:マスメディア集中排除原則の緩和について会長はどんな形が望ましいと思いますか？

氏家会長:これについてのビジネスモデルは誰もわからない。要するに地方局との関係だけで言えば、困っている地方局を、キー局あるいは、それに準ずる局が、つまりネットワークが一体となって助ける、ということのために集中排除法を緩和することが必要となる。そういう一般論だけで言えば、まったくその通りだと思う。

記者:NHKさんが茨城県で県域放送を始めるということに関してはどうですか？

氏家会長:あそこには民放の県域放送がないんで、出られたんだと思います。

私どもの民放界で心配していますのは、埼玉とか神奈川とか群馬とかには、U局がございます。この経営を圧迫するような形で、もしNHKさんがおやりになるなら、それは民業圧迫ではないか、という問題が出てくる。この問題で非常に重要なのは、本体はそんなに出入りできないから、系列会社、関連会社を作って経営拡張させて、そこで独占的に儲けに走ってくるというものがあります。それを、我々は非常に問題にしている訳です。それは、断固として排除していかない限り、非常に社会的問題が、日本の経済体制のありかたについて、問題が出てくると思いますよ。

NHKは税金でやっている訳ですから、NHKと我々民放とは、ちゃんと垣根を作って、それぞれのフィールドで生きる、それが、ルールだということです。

5. 営業状況

記者:上期の営業状況の総括と、下期の予想などありましたら。

萩原社長:細かい数字は、9月の集計が全部済んで中間決算でということになります。大雑把に上期に関して申し上げますと、タイムに関してはお蔭様で高視聴率に恵まれていますので、かなり小幅なマイナスで済んでいると思います。ただし、スポットに関しては、残念ながらかなり大幅なダウンということ

になります。2ケタのダウンになります。従って、タイム、スポット合わせた全体としては、タイムでかなり支えたということもあって、1ケタのマイナスで済んだというのが現状です。下期に関しては、はっきり申し上げて予想がつきません。

10月あたりはかなり回復の兆しがあるというふうに、ある程度見込んでいたのですが、必ずしも出足はそんなによくないです。

ただ、11月は今のところ、昨年比ほぼ100%はクリアしております。ということですが、12月以降がどうなるかということに関しては、甘い見通しはできないだろうということです。ですから、下期に関しては一応、予算通りというつもりであります。

ただ、下期のタイムに関しては、日本シリーズがあります。それから、今年は日米野球がございまして、8試合組まれているうち6試合を私どもで中継することになっております。そのうち5試合はナイターです。

イチローが帰って来たり、例のラリー・ポンス氏が来たり、日本もカブレラも出るらしいですから、相当話題になると思います。これも折り込み済みで、一応予算通りというふうにしてます。

6. その他

記者：他に何かありましたら。

萩原社長：「日テレホイssl」についてですが、明日からスタートすることになります。いわゆる企業の不正とか不祥事が続発しております。それが、発覚する端緒となったのがいわゆる内部告発というケースが多いということです。

やはり、自分の会社の事とは言え、不正・不祥事を見て見ぬふりをするということは、むしろ社のためにならないということは、この所のいくつかの不祥事で、はっきりしていると思います。そういった関係で、日本テレビでは、おそらくこの業界では、この制度を公式に取り入れたのは初めてだと思いますけれども、「日テレホイssl」という名前で、その制度をスタートさせました。社内報告制度というふうに書いてあります。

いわゆる法令違反、あるいは就業規則違反を把握した場合にはいち早く、トップに対してそれを連絡する、報告することを、ある種義務づけた制度です。常勤監査役を窓口として、匿名でも、実名でもいいということで、封書かメールでいいということです。

この場合、告発者の名前を秘匿すること、人事待遇等々での不利益をもたらさないというのが、非常に大事になってくると思います。

この辺は人事規定のほうに明記します。自社の利益のために、不正、不祥事を見逃さない、それを見て見ぬふりが一番いかんということで、こういう制度を発足させることになりました。

以上